

演題番号

中学生を対象とした認知症啓発授業の感想文の分析

—近江八幡市における認知症教育の取り組みより（その2）—

事務局記入) ○小池高史、村山陽、鈴木宏幸、鄭惠元、野中久美子、大場宏美、
桜井良太、藤原佳典（東京都健康長寿医療センター研究所）

【目的】認知症啓発授業が中学生にどのように受け止められたかについて検討するために、生徒たちが授業後に記入した感想文を取り上げる。教育効果を検討するために授業や講座の感想文を分析する試みは広く行われている。先行研究は、感想文の内容を分類して分析したものと、テキストマイニングの手法により感想文で書かれた単語を量的に把握したものに大別できる。単語数を把握する研究では、対象者全体の感想文をひとまとめにして、集計・分析するものが主流である。本研究では、認知症啓発授業が全体的にどう受け止められたかという点に加えて、対象者の属性や経験、知識量によって、その受け止められ方が異なるかどうかという点を明らかにすることを目的とする。

【方法】近江八幡市内の中学生を対象とした認知症啓発授業の感想文576件(4中学校の3年生)をテキストマイニングし、感想文の中で多く使われた言葉を検討した。また、性別、祖父母との同居、認知症高齢者との交流経験、認知症に関する知識の量によって、感想文に表れる言葉の違いがみられるかどうかを分析した。認知症に関する知識の量は、子ども向けに作成した認知症に関する知識を問う12問のテストによって把握した。テキストマイニングには「KH coder」を使用し、全単語の中でも、特に感想を述べる時に現れやすいと予想される形容詞と形容動詞の出現数を抽出した。抽出された単語の中でも、ネガティブな意味を持つ単語の出現頻度や生徒の属性ごとの出現頻度に注目して分析した。本研究は東京都健康長寿医療センター研究所の倫理委員会の承認を受けた。

【結果】対象となった生徒の基本属性は、男子が51.9%、祖父母(曾祖父母含む)と同居が37.2%、認知症高齢者との交流経験ありが20.7%、認知症知識高得点(6/12点以上)が53.0%であった。感想文全体における出現頻度の高い形容詞・形容動詞は、高い順に「優しい(1.47%)」、「良い(1.08%)」、「大切(0.87%)」、「ない(0.47%)」、「不安(0.40%)」であった(パーセントは、全単語数における当該単語数の割合)。また、ネガティブな意味を持ち、出現頻度でも上位にあった「怖い(全体では0.20%)」に注目すると、男子(0.15%)よりも女子(0.25%)で、祖父母と同居している生徒(0.19%)よりも同居していない生徒(0.22%)で、認知症知識得点が高かった生徒(0.19%)よりも低かった生徒(0.25%)で、出現順序や全単語数における出現数の割合が高かった。

【考察】感想文の中に多く現れる形容詞・形容動詞は、「優しい」などのポジティブな意味を持つ単語であった。一方で、「怖い」というネガティブな言葉に注目すると、生徒の属性や経験の違いによって、出現順序に差がみられた。

【結論】感想文の分析から、中学生の認知症啓発授業の受け止め方にも属性やこれまでの経験による差異がみられることが示唆された。今後の啓発授業の方法として、一斉授業よりも属性・経験にそった個別の内容のほうが有効である可能性が考えられる。

E-mail ; tkoike@tmig.or.jp